

ゆが くに
歪みの国の
アリス

ふ し ぎ くに
不思議の国のほとり

かぶしきがいしゃ
株式会社ナイトメアスタジオ / 原作

こづかとうり
孤塚冬里 / 著

こ
チェリ子 / イラスト

004 第五章 首切りの城

081 第六章 赤と黒の迷宮

132 第七章 まどろみの現し世

191 最終章 狂宴のはて

エピローグ

214 side Kohel

228 side Alice



アリス 僕らのアリス

あなたの腕を 足を 首を 声を 僕らにください

あなたを傷つけるだけの世界なら捨ててしまつて

ちぎれた体は狂気に包まれて穏やかに眠る

さあ、覚めることのない悪夢をあなたに……



第五章

首切りの城



このまま、永遠に辿り着けないのではないか。

不安が胸にふくらみ始めたころ、霧の中に黒い大きな影が見え始めた。チエシヤ猫が歩き進むにつれ、それは建物のシルエツトへと変わっていく。

はつきりとお城の形が見えたころ、赤い海の終わりも見えた。再び白い砂浜がアリスたちを迎える。

「あのお城が、女王さまのお城？」

「そうだよ」

砂浜に下ろしてもらったアリスは、城を見上げた。

城は小高い丘の上に立っている。どうやって行こうか迷う必要はなさそうだった。なぜなら、ご丁寧にも砂浜から城までのゆるやかな坂道に、石が敷き詰められていたから。ぐねぐねとよく曲がった道ではあるが、道案内の必要はない。

石が敷かれた道を進むと、砂浜だった地面には徐々に植物が生い茂り始め、城に近づくにつれ

緑なみだが濃こくなつていく。

小道こみちが終おわると、そこがゴールだった。すぐ目の前まへに、荘厳そうごんな城しろがそびえ立たつていた。城しろの手前まへには草原そうげんが広ひろがり、背後はいごには暗くらい森もりがまるで城しろを抱だきこむようにして寄り添そっている。草原そうげん、



と言うと聞きこえがいいが、言つてしまえば雑草が伸び放題になつてしまつていただけだつた。

「お城、立派だけど……ちよつと荒れてるみたいね？」

誰も手入れをする人間がいまいのだらうか。見回してみたが、煌びやかな門や美しい庭園はない。どうも、想像していた城とは違ふようだ。

膝上まである草をかき分けながら、城を目指して進んでいく。草で見えなかつたが、途中で縁の欠けた石段があり、その先に鉄製の大きな扉があつた。近づくくと、両開きの大扉一枚ずつに模様があることに気がついた。それはハートのクイーンのレリーフで、ランプの図柄を連想させる。

扉には大きなノッカーがついていていた。それをつかみ、打ち鳴らす。ガンガン、とこもつたような鉄の音が城の内部に響いていくのが聞こえた。

「……………」

しばらく待つてみたが、反応がない。

もう一度、今度はさつきよりも強めにノッカーを鳴らしたが、何の反応もなく、だめでもともとの気持ちで力をこめてドアノブを引く。すると、軋んだ音を立てながらも、大扉はあつさりとお開いてしまつた。

ごめんください、と小声で断りながら、開いた隙間から中を覗きこむ。室内は薄暗く、よく見えなかった。

「誰もいないのかしら……」

鍵が開いていたのは相手の落ち度だとしても、勝手に入ったとなれば怒られるかもしれない。そう考えて、アリスは見咎められないように素早く体を城の中へと滑りこませた。

室内に入ってみても何も見えない。開いた隙間から入る光の筋を頼りに奥へ進もうとすると、後ろにいたチェシヤ猫が口を開いた。

「首に気をつけるんだよ、アリス。きみはやわいから」

どういうことだと聞く暇もなかった。振り返ったアリスの目の前で、開いていたはずの大扉が大きな音を立てて閉まる。

「やだ！ ちよつと！」

あわてて大扉を押したり引いたりしてみたけれど、びくともしない。さつきは少し引つ張つたらずぐ開いたのに。

「もう！」

苛立ち紛れに扉に手を打ち付ける。また、ひとりにされた。これではホテルの時と同じだ。あ

の暗い通路でのことを思い出しかけ、あわてて首を振って記憶を追い出す。何も今、思い出さな
くていい。

アリスは軽く深呼吸をしてから、暗い室内を見回した。

目をこらして見ると、うつすらとはあるが部屋の作り程度はわかる。天井は高く、中央には
シャンデリアらしき影が見えた。玄関ホールだろうか。正面には大きな階段があり、二階へと続
いているようだ。階段の先は、暗くてよく見えない。背後の扉が閉まってしまったとなると、前
に進むしかない。

ゆつくりと足を踏み出したとたん、ぐんにやりとした何かにつまずいた。

「うわ」

気持ちの悪い感触に、思わず声もれる。一体、何を踏んでしまったのだろう。何かを踏んだ
あたりを避け、また一歩ずつ前へと歩き出した。何の頼りもなしに歩くのは心許なく、壁に手を
這わせながら前に進むことにした。ここが普通の家だったならば、扉からほど近い壁に電気のス
イッチがあるのだけれど、とため息をもらしそうになった時、アリスの指先に何かに触れた。慎
重にまさぐると、何かのレバーのようだった。

「えい」

深く考えず、レバーを引く。

ボタンは押すために、レバーは引くためにあるのだ。

レバーを引いた瞬間、ホールの奥から順に壁際にあつた燭台に火が灯つていく。火の灯る音と共に、徐々にホールの中がぼんやりと明るくなつていった。最後に、階段脇の燭台に火が灯ると再びホールは静寂に包まれる。期待していなかつたが、照明のスイッチだつたようだ。

天井から吊り下げられた巨大なシャンデリアにも明かりが灯るんじゃないかと見上げたが、何も起こらなかつた。あれがついてくれれば、ホールもちゃんと明るくなつたらうにとホールに視線を戻して、目を見開いた。

「!？」

目が映し出しているものを、脳みそが理解することを拒絶していた。見えているのに、自分が何を見ているのかわからない。

ホールの床には、おびただしい数の死体が転がっていた。

人やネズミ、鳥といったあたりとあらゆる種類の動物の死体が、無造作に転がされている。何の規則性も見いだせないようなその死体の数々には、ひとつだけ共通点があつた。

——首から上が、ない。

蠟燭の心許ない明かりが、ぬらぬらと赤く濡れた首なし死体の断面を照らしている。あまりに凄惨な光景は逆に現実味がなく、趣味の悪い作り物のようにも見えた。

アリスは自分の足元すぐ近くにまで及んでいる死体の数々をしばらく見つめた後、無言のままくるりと踵を返し、入って来た大扉へと戻る。その冷たい鉄扉に手をつけた瞬間、今まで麻痺していた恐怖が一気に押し寄せた。

「……開けて!! チェシヤ猫!!」

拳にした手を叩きつけても、扉は開かない。冷や汗が流れ、手が冷たくなっていくのが自分でもわかる。

「ねえ、そこにいるんでしょ……!?!」

いくら叩いても、扉は分厚い音を弾き返すだけで一向に開く気配がなかった。

「チェシヤ猫! 開けてっつてば!!」

後ろを振り返りたくない。何の音もしないはずなのに、自分の呼吸の音すら恐ろしいもののように感じてしまう。

手が腫れるのもかまわず扉を叩き続けた。それなのに、扉は固く閉ざされ、チェシヤ猫の声が聞こえてくることもなかった。

——何も、誰も助けになど来ないのだ。

真つ赤になつた手を胸の前でにぎりしめ、恐る恐るホールを振り返る。できる限り死体を視界に入れられないように心がけながら、退路を探した。自分でどうにかするしかないなら、こんな場所からは一分でも一秒でも早く離れたい。

必死に周囲を見渡すと、中央に二階へと続く階段の他に、左右にひとつずつドアがあるのを見つけた。どつちが何の部屋かだなんてこの際どうでもいい。アリスは死体を踏まないように、でも見ないように足をひよこひよこ動かしながらドアを指す。

——右と左。選ぶ時の決め手は、またぐ死体の少ない道ということだけ。



最後の死体を大きくまたぎ、左のドアに飛びつく。

勢いのままにドアを開けたとたん、

「あつごめんなさい」

と何かひらひらしたものが顔にぶつかりながら床に落ちていった。

「……いえ、別に」

ひらひらしているくらいなので、痛くはない。痛くはないものの、室内はそんな感じの物体がひしめき舞い踊るひどい有様で、アリスは急いで扉を閉めると、邪魔にならないようにと壁際に体を寄せた。

部屋の中には、一辺が一メートルくらいはありそうな巨大なトランプたちがひしめいていた。正確に言うと、巨大トランプの切れ端たちが。

なぜか、どのトランプもちょうど真ん中あたりで切断されている。

トランプたちには薄っぺらい小さな手足がくっついており、下半分は目がないのか自分の半身を探しながら駆け回っては壁に激突し、上半分は足がないので手で這いずるようにしてやはり自分の半身を探している。

「違う！ マークが違う！ 俺はクローバーだってば！」

「誰かあたしの下半分、知りませんか？ ダイヤの七なだけど……」

「おーい、ここにクイーンのはしっこあるよー！ ダイヤの！」

「やった！ 俺の下半分やっと思つけた……！」

「おまえ……それ絶対違うぞ。絶対おまえのじゃないって」

見たところ口のようなものがあるのかはわからないが、上半分は話せるようだった。そのせいで、室内はパタパタと駆け回る足音と迷子を探す声でずいぶんとにぎやかだ。忙しそうなおもてなしが、ただ見ているわけにもいかず、アリスは思い切つて声をかけた。

「あのーう……」

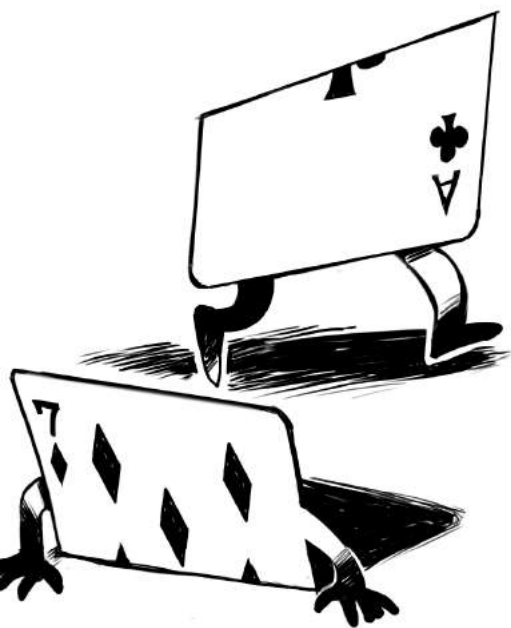
「誰かハートの三、見かけたら教えてー！」

「あたしの下半分、どこー!？」

けれど、アリスの声が小さいせい、誰も見向きもしない。

「すみませーん」

今度はもう少し音量を上げてみたが、アリスの声に反応するトランプはいなかった。どうしたものかと室内を見回していると、起き上がりうとして他のトランプの下半分に踏まれ、伏せたままのトランプを見つけた。上半分は動きがのろいとは言えども、踏まれつばなしのトラ



ランプはそれだけだ。

ぶるぶると手を伸ばして頭を起こしては、パニックを起こしたように走り回る下半分に勢よく踏まれ、床に押し付けられる……という動作を繰り返している。さすがにかわいそうになり、アリスはトランプたちを避けながら倒れたままのトランプを引張って部屋の間まで運び、ひっくり返してやった。散々踏みつけられたトランプは、ダイヤの六の上半分だったようだ。

「大丈夫？」

「うう……あたしはもう、だめ……」

「しっかりして」

名女優さながらに、薄っぺらい小さな手を震えさせている。

「何があつたの？ どうしてみんな、バラバラなの？ ホールの首なし死体はどういうこと？」

一度に問いかけると、ダイヤの六（上）はじつとこちらを見上げるように体をわずかに持ち上げた。目がついているようには見えないが、きちんと見えているらしい。

「……あんた、誰？ 首がついてるなんてめずらしいわね」

「私はアリス」

「アリス!? あああ……!!」

名乗つたとたん、短い腕を振り回して猛然とアリスを叩く。小さい手なので痛くはなかった。

「ひどいわ、アリス！ あなたがなかなか戻らないからあたしたち、こんなことにイ……！」

「そ、そうなの……？」

「女王陛下のご機嫌が悪いから、あたしたち気晴らしにこんな……!!」

「……えつと、よくわかんないけど……ごめんさい」

戻るも何も、アリスはこの城に来たのは初めてだし、女王陛下の機嫌が悪いことにも責任がないように思う。それでもあまりに悲痛な訴えに謝らずにはいられなかった。

「あ、あたしは、あたしはもうずっと、自分の下半分を探して……」

ダイヤの六(上)は興奮しすぎたのか、今度はしゃくり上げ始めた。

「でも一度倒れたら起き上がれなくなっちゃって、そしたらみんなに踏まれてエ……うえええ！」

「ああ、な、泣かないで」

「うえええ!!」

「わ、わかった！ あなたの半分、一緒に探してあげるわ。ね？」

「ほんと？」

ピタ、と鳴き声が止む。子どもみただなと微笑ましく思いながら、

「うん。ほら」

ダイヤの六(上)を腕に抱え上げた。室内は、相変わらず迷走するランプたちで大荒れだ。この中を、ダイヤの六(下)を探すのは、ようは動く神経衰弱のようなものだろう。

「あつ、いたつ!」

「え、どこ?」

「ああつ、見失ったあゝ!」

「どのあたりにいた?」

「……あつ、いたつ!」

「だからどこ?」

「ああつ、見失ったゝ!」

「……………」

「あつ、いた! ……ああゝ!!」

下半分は何も見えていないのでとにかく走り回る一方、上半分は自分の下半分を見つけてこ
とはできても足がないのでのろのろと追いかけることしかできない。これではいつまで経つても
ペアはできあがらない。非効率すぎる。

「……わかったわ。何が悪いのか、よくわかった」

ため息をつくのと、アリスは腕の中でもがくダイヤの六（上）を部屋の隅にある椅子の上へと載せた。背もたれに寄りかからせるようにすると、何とか立たせることはできる。

「ああもうつ、見失っちゃったじゃない！」

好き勝手に不平不満を口にするダイヤの六（上）に向かって、アリスは釘を刺すように指を突きつけた。

「あなたはここでじっとしてること」

「でもおく……あつ、いたつ」

下半分を見つけると反射的に動くとしてしまうダイヤの六（上）。その体を押しとどめ、もう一度椅子に座らせた。

「だめだつてば！ 大人しくしてて。早く見つけたかったら、絶対にここから動いちゃだめだよ。いい？」

「はあーい……ああッいたあツ!!」

言っているそばから、べしやりと椅子からすべり落ちた。

アリスはため息をひとつつき、地面に伏せているダイヤの六（上）をそのままに、近くに飾ら

れていた白い胸像を取りに行く。学校の美術室で見かけるものよりもだいたいぶぶりな、ちよつとしたインテリア用らしい胸像を両手に抱えてアリスが戻ると、ダイヤの六(上)はさっきの場所から三十センチほど進んだだけだった。

「ちよつとごめんね」

ダイヤの六(上)を椅子の上に戻し、その上にそつと胸像を置いた。

「アリス、重いですウウ！」

驚いたように、手をばたつかせる。

「痛くはないでしょ。ガマン」

「痛くはないですけどオウ」

可哀想だけれど、下半分を見つけるたびに動かれてしまうと、いつまで経ってもペアはできあがらない。少し考えればわかることだと思ふけれど、どうもトランプたちは気が短いのか、あまり考えないのか、すれ違いばかりを起こしている。城で起きた惨状を確認するためにも、この神經衰弱を終わらせなければ。

気合いを入れ直してから、トランプの海を見つめ直す。何か良い方法はないかと考えたが、結局は思い浮かばず片っ端から赤いカードを捕まえていくことにした。

見つけたいのは、ダイヤの六の下半分。

アリスは走り回る下半分の色を見て、素早く手を繰り出した。ハート、ハート、ダイヤ……でも七、となかなかお目当てのカードは捕まらない。ハート、ハート、ダイヤの九。ひっくり返せばダイヤの六なのに、と捕まえた子を小脇にはさんだ。下半分は口がきけない分静かではあったものの、動きは素早いし、捕まえると暴れる。ちよつとした重労働だ。

それでも、走ってくる赤いカードを捕まえているうちに、徐々に赤いカードの数が減っていく。このまま続けていけばきつと見つかるだろう。アリスの体力さえ持てば。

「こら！ 大人しくしてて！」

抱えこんだハズレのランプたちは、捕まえられた後も好き勝手に暴れていた。おかげで、もう腕は限界に近い。腕だけでは押さえつけていられなくなると、アリスは膝でランプたちを床に押さえつけた。

ダイヤの二、間違えたスピード、ハートの三。どんどんハズレが増えるたびに、まとめたランプの反撃が強くなる。全体重をかけているのに、今にも体が浮きそうだ。

残り少ない赤いカードを必死に捕まえる。ハートの三、ジャック、ダイヤ、そして……

「あ、あった」

ようやく、ダイヤの六の下半分を見つけた。

「ああ、私の下半分ー!!」

椅子の上で、ダイヤの六(上)が叫んだ瞬間、足で押さえつけていたハズレトランプたちが大反乱を起こした。

ぶわりとトランプが宙に飛び散り、その拍子にアリスは尻もちをつく。その腹の上を、トランプたちが踏みつけて逃げていった。軽いので、ダメージはまるでない。

「アリス、アリスっ！早くこれ、どかして！それで早くくっつけて！」

狂喜乱舞するダイヤの六(上)は注文が多い。

「でも、くっつけるものを探さなきゃ……」

ダイヤの六(下)を抱えたまま起き上がると、まだ腹の上に足を乗せていたトランプたちが、はらはらと落ちていく。

「あるわよ、セロハンテープ！ほら、あのテーブルの上！」

指さされた方を見ると、たしかに部屋の奥のテーブルの上にあった。巨大なセロハンテープが。さっきまであっただろうか。あまりに城の雰囲気から浮いているし、まるでたった今現れたかのようだ。

「早く、早くっ！」

不思議に思いながらも、『こちら』ならそんなこともあるだろうと深く考えず、ダイヤの六(上)の上の胸像をどかして下半分と一緒にテーブルへと向かった。

「こら、暴れないの！」

くつつける作業の時も、下半分は大いに暴れた。今、何をされようとしているのか、理解できていないのかもしれない。しかたなく、テーブルの上にアリスも乗り、膝で下半分を押しさえつながらゼロハンテープに手を伸ばす。

「ちゃんとくつつけてね！ ずれたりしたら嫌よ！」

「……善処します」

誰だつて、上半身と下半身の接合部がずれたりしたら嫌だろう。アリスはゼロハンテープを丁寧に切り、慎重にダイヤの六の上と下とをくつつけた。

「これでいい？」

「ありがとう、アリス！ 生き返ったみたいなきぶんよ!!」

ようやく全身自由に動かせるようになったダイヤの六が、感激したようにアリスへと体当たりした。おそらく、本人は抱きついたつもりなのだろう。

ほつと一息つこうとした時、ふと背中に強い視線を感じた。振り返ると、さつきまで自由気ままに走り回っていた下半分も、床を這いずっていた上半分も全員びたりと静止し、アリスを見上げてゐる。

「……え、えーと……」

「「私も！ 私も！ 私も！ 私も！」」

「「僕も！ 僕も！ 僕も！ 僕も！」」

トランプたちが一斉にテーブルへと飛びかかった。

「ぎやあつ」

「「私も！ 私も！ 私も！」」

「「僕も！ 僕も！ 僕も！」」

「わ、わかった！ わかったから落ち着い——」

興奮したトランプたちは、我先にと前に出て、ついにはアリスの体によじ登り始めた。

「キヤアツ、体に登ってこないでえツ！」

いくら軽いとはいえ、全員で乗られると紙だつてそれなりに重い。全員に乗られてしまう前にあわてて逃げ、順番にお願いしますとなぜか、アリスの方が頭を下げた。